

## 前漢期黄河故河道復元

——山東省聊城市～平原県～德州市——

長谷川 順 二

はじめに

中国第二の大河・黄河は、長大な河道の一部が数千キロに及ぶ大幅な変動を繰り返してきたという、世界的に見ても稀な特性を持つ河川である。黄河の河道は幾度となく変遷を繰り返して、時には魯西台地の南側へと流れを変え、現在の河北省・山東省・河南省・安徽省・江蘇省にまたがる大平原を形成した(図1)。「史記」を始めた文献資料には、黄河の決壊や河道変遷に関する記録が数多く見られる。水利電力部黄河水利委員会編『人民黄河』<sup>(1)</sup>によれば、文献資料の記録を集めると大規模な河道変更が二六回、決壊等の水害が一五九三回発生したという。

古代の黄河河道については、歴史地理学における古くからのテーマの一つであった。<sup>(2)</sup> 地図としての復元に限っても代表的な文献を挙げれば、南宋・程大昌『禹貢山川地理図』、元・王喜『治河図略』、清・劉鶚『歴代黄河変遷図』

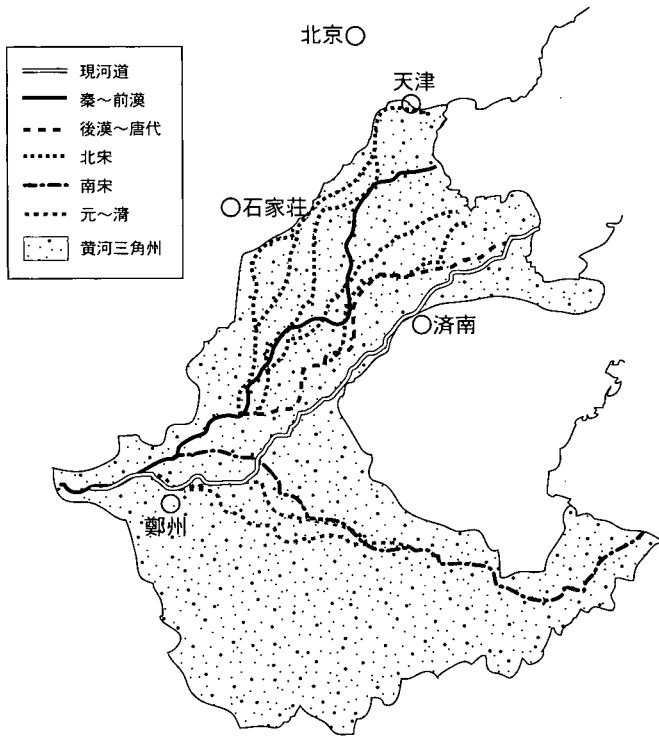


図1 黄河変遷図

考』など、多くの研究者が復元を試みている。清代考証学の成果をまとめた清末・楊守敬『水経注図』『歴代疆域図』、この成果を受けてさらに近代考古学の成果を取り入れて一九八二年に出版された『中国歴史地図集』の完成へとつながる。<sup>3)</sup>

胡渭『禹貢錐指』によれば、黄河は春秋時代の周定王五年（前六〇二）に文献に記される最初の改道（河道変動）が発生し、戦国～統一秦・前漢を経て王莽新始建国三年（後一一）に第二回の改道が発生したとされる。前漢河道とは、この前六〇二年～後一一年の約六〇〇年間の河道を指す。時代的には、戦国諸侯の争覇から始皇帝の統一を経て秦末の項羽・劉邦の対立、そして前漢王朝という統一王朝の成立によって

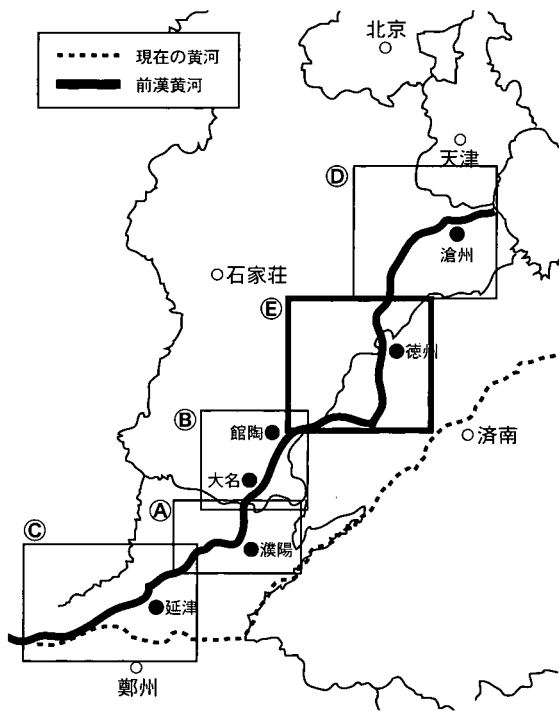


図2 検討範囲

黄河下流域への進出・開発が進んだ時期でもある。<sup>(4)</sup>前漢期は二〇〇年間を通じて『漢書』溝洫志に一〇回の黄河決壊記事が見られ、後代と比べても決壊発生頻度の高い時期とされる。しかし裏を返せば、決壊記述の増加は戦国期までは定住者の少なかった黄河下流の近辺にまで開発が進展した事の証左とも言える。

本研究は春秋期から戦国・統一秦を経て前漢末に至る時期の黄河河道を対象として、文献資料とリモートセンシングデータの両面からの河道復元を試み、すでに四地域での検討を完了している。<sup>(5)</sup>

本論文は「前漢期黄河故河道復元」としては第五回目にあたり、今までの復元範囲と合わせて黄河下流域全体の前漢河道復元が完了する(図2範囲⑤)。

### 一 先行研究の比較

今回の対象地域には、今までの対象地域では見られない興味深い点がある。先行研究の各説河道に、大きなズレが見られるのである。前漢河道の復元には、主に『水経注』『大河故瀆』および『史記』『漢書』の黄河関連記述が用いられる(文献記述については第二節で詳述)。こ

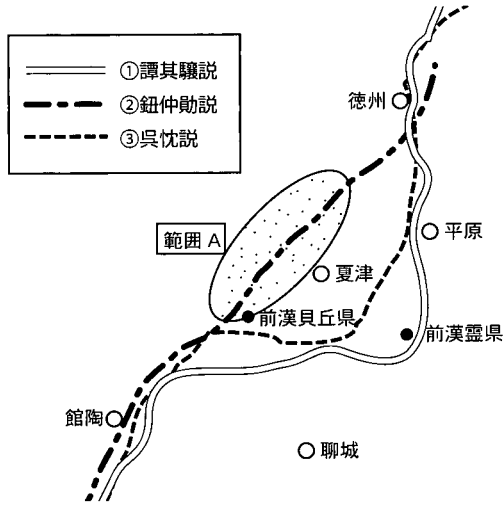


図3 各説比較

③ 吳忱等「黄河下游河道變遷的古河道証拠及河道整治研究」  
上記二種の手法を合わせた検討。

重ねてみると相違点は一目瞭然である(図3)。①は文献記述にある「靈県」を経由するルートを取り、三説の中では最も東側を取っている。②は逆に堤防跡や「沙河」と称される旧河道に基づいて河道を想定したためか、最

こには黄河の經由した地点の県城が列挙され、それらの県城位置を復元する事で河道の経路復元を行う。そのため想定された河道のうち県城に近い場所では大きな差が生じないのだが、この地域に限っては顕著な差が見られる。以下に特にズレの顕著な河道説を列挙する。

① 譚其驥主編『中国歴史地図集 第二冊 秦・西漢・東漢』  
『水経注』大河故蹟の記述をベースに、『漢書』溝洫志等の決壊記述と合わせて経路を検討。決壊記述のある「館陶」「清河・靈・鳴犢口」「平原」の三地点を経由している。

② 鈕仲勛等編『歴史時期黄河下游河道變遷図』  
現在の地形をベースとして、黄河由来堤防等から経路を検討。「館陶」「平原」は經由しているが、「靈県(現在の高唐県)」は經由せず。

も西側になる。前述した「靈県」を經由していない事から、この説は文献記述の詳細の検討を行っていないものと思われる。最後の③は②と同様に地形から河道を想定しているが、極力文献記述との齟齬を少なくしようとしたのか、①②の間を通っている。

この地域の河川は、黄河に限らずほぼ全ての河道が南西↓北東方向へと流下している。そのため地形的には②の河道は無理がない。一方、文献記述を重視して「靈県」を經由する①③の河道とする場合、河道の直進を阻害する丘陵や高地等の地形的要因が必要となる(図3・範囲A)。南北朝以前には夏津県の西南に「貝丘」という県が存在しており、『中国歴史地図集』第一冊・戦国斉魯宋図には「沮丘」という地が置かれている。もしこれが『中国歴史地図集』のように戦国以前から存在する丘陵に由来する地名だとすれば、これが阻害要因となったとも考えられる。この点については後ほどリモートセンシングデータと合わせて検討を行う。

## 二 文献資料に見る黄河故河道

前述したように、本稿の検討範囲は各時代の河道が流れている。ここではその中でも前漢河道に関する文献記述を採り上げて検討する。

### (一) 『水経注』河水注

『水経注』によれば、前漢河道は「兗干県・貝丘県・甘陵県・文亭城・平晋城・靈県・郟県・平原県・繹幕県・高唐」の各県・城を經由したとある<sup>(8)</sup>。このうち『漢書』地理志に記述のある県は「兗干(東郡)、平原・高・高唐

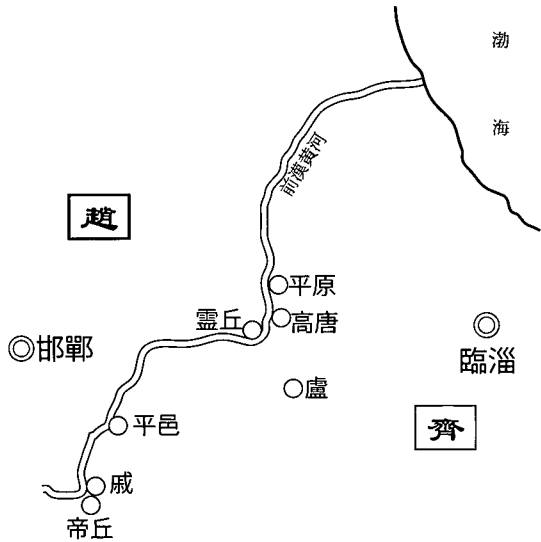


図4 齊趙黄河

(平原郡)、繹幕・靈・鄆・貝丘(清河郡)の八箇所である。<sup>(9)</sup> 記述のない県のうち、甘陵県は『漢書』地理志では厓県とされる。艾亭城・平晋城に関しては前漢期の状況は不明である。

## (二) 戦国時代…趙齊の対立

春秋末～戦国時代において、この地域は晋(趙)<sup>(10)</sup>と齊の交錯地であった。春秋末期、齊はすでに高唐・靈丘を領有し、前漢黄河の東岸に達していた。対して晋(趙)は趙簡子の東方進出政策により太行山脈の東へと展開し、戦国初期頃に華北平原へと到達した。<sup>(12)</sup> これにより黄河を挟んで晋(趙)と齊が直接対峙する図式となった(図4)。

両国は、主に黄河の東西岸にて争うこととなる。春秋末期の哀公二年(前四九三)、晋の趙簡子が衛靈公の死去に乗じて天子である聃蒧を衛都の北側に位置する戚城に送り込み、衛君に即位させた。これにより、趙簡子は齊国へと攻め込むための黄河東岸の橋頭堡を確保した。<sup>(13)</sup> またその八年後である哀公一〇年(前四八五)には、趙が齊国の高唐を攻め、その郭を毀つという記述が『左伝』に見られる。<sup>(14)</sup> 他にも趙が「平邑」という城を黄河東岸に築いたという記述が『史記』趙世家にある。<sup>(15)</sup>

さらに、『戦国策』趙策に、燕が趙を攻めた際に、趙王が盧・高唐・平原の三邑を割譲して齊に助けを求めたと

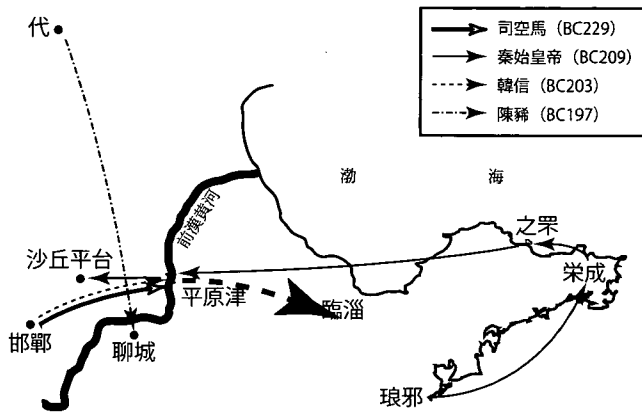


図5 平原津関連

いう記述がある。<sup>(16)</sup> この三県はいずれも黄河の東岸に位置し、元々齊の領有であったが、この記述の時点では趙が有していたと思われる。

(三) 平原津をめぐる人々

戦国末期から前漢初期にかけて、この地域には「平原津」と称される黄河の渡河地点が存在した。『史記』『漢書』によれば、秦始皇帝や韓信など著名な人物がこの渡し場を利用している(図5)。

① 司空馬

『戦国策』によれば、司空馬は秦を出国した文信侯呂不韋とともに趙国に入った。<sup>(17)</sup> その後、秦が趙を攻めてきた。司空馬は秦への対応策を趙王へと上奏したが、聞き入れられなかった。そこで司空馬は東へと向かい、平原津にて黄河を渡って趙を去った。<sup>(18)</sup>

ここで注目されるのが、「平原津令」の存在である。彼は司空馬が去ったあとで趙が秦に敗れたことを知り、「嗟嗟乎」したとある。<sup>(19)</sup> 『広韻』に「嗟嗟」は憂声とあり、この語が倒置した形であるという。つまり司空馬の言ったとおりになったことで、趙の運命を憂いたのである。これらのことから、この平原津令は趙側の人物と推測される。

## ② 始皇帝

秦始皇三十七年（前二一〇）、中国全土を統一した始皇帝は巡行を行い、全国を巡った。しかし途中の平原津で病を發し、沙丘靈台にて病没した。このときのルートは『史記』秦始皇本紀によれば、山東省の琅邪から朐成山（『史記正義』によれば萊州にある）を通り、之罘にて巨魚を射殺した。そして平原津に到ったところで病を發し、最終的に沙丘平台にて崩じたとある。<sup>(20)</sup>つまり山東半島を逆時計回りに巡ったことになる。そして西へ向かうために平原津で黄河を渡ったが、そこで病を發して結局沙丘（現在の広宗県付近か）の平台で病没した。

## ③ 韓信

前漢高祖四年（前二〇三）、高祖の命により韓信は斉国を攻めた。しかし高祖は同時に酈食其も派遣し、弁舌をもって斉王を降伏させようとした。首尾良く斉王を口説き落とし、漢への服属を確約させた酈食其は、韓信に斉の降伏を通達して兵を引き上げるようにと連絡した。韓信はこの通達を黄河を渡る前の平原津にて受けたが、謀臣の蒯通の言に従い、通達を無視して黄河を渡り、斉へと攻め込んだ。<sup>(22)</sup>

新修『平原県志』によれば、韓信が酈食其からの通達を受けた野営地が、現在の「東・西韓宮村」であるという。<sup>(23)</sup>

## (四) 陳豨の反乱

項羽を倒して前漢王朝を建てた劉邦は、王朝創立の功臣を地方へと封建した。功臣の一人である陳豨は代の相國に任ぜられたが、高祖一〇年（前一九七）八月に代の地で反乱を起こした。<sup>(24)</sup>陳豨は配下の将を各地に攻め入らせたが、その中の一人、張春について「渡河擊聊城。」という記述がある。<sup>(25)</sup>

このとき陳豨は代にて挙兵した。代は現在の河北省蔚県付近に当たる。蔚県付近を本拠とした陳豨は張春を南下



させ、中山・鉅鹿付近を通り、黄河を渡って聊城を攻めさせたと考えられる。つまり前漢期の聊城は黄河の東南側に位置したと思われる。

#### (五) 黄河の決壊関連

本稿での検討対象地域では、前漢期において幾度か決壊が発生している。そのうち決壊地点が判明しているのは、以下の二度の決壊記述である。一つは「清河靈鳴犢口」での決壊である。<sup>(26)</sup> 前漢元帝永光五年（前三九）に起こった決壊は、「鳴犢河」という支流を発生させた。

一つは、平原県での決壊記事である。ここでいう「後二歳」とは、『漢書』溝洫志の前段に述べられている館陶・東郡金堤での決壊、および治水工事のことを指す。この時成帝は、三旬・三六日間で決壊を塞いだ王延世の功績を称え、翌年を河平元年（前二八）と改元している。<sup>(28)</sup> つまりこの平原県での決壊が起こったのは、改元の二年後に当たる河平三年（前二六）になる。

この時、前漢黄河は平原県にて決壊し、済南・千乘に流入したとあるので、平原県から東方向へと決壊して、恐らくは後漢河道に似た流路を取ったと思われる。

また前漢期中最大規模の黄河決壊である「瓠子河決」<sup>(29)</sup>の際に、興味深い記述がある。当時の丞相である武安侯田蚡は、「鄆」を食邑としていた。鄆は黄河の北側に位置するため、黄河の南側へと決壊した「瓠子河決」では鄆に被害は及んでいないという発言が『漢書』溝洫志にある。<sup>(30)</sup>

### 三 県城位置の検討

二(一)にて取り上げた『水経注』に記述のある「発干県・貝丘県・甘陵(唐)県・艾亭城・平晋城・靈県・郿県・平原県・繹幕県・高県・修県・安陵県」の各県、および二(四)にて記述のある聊城県、二(五)にて決壊したとされる「鳴犢口」に関して、正史や地理書等の記述を拾い上げて検討する。

#### 発干県

前漢武帝期に匈奴との戦いで功績を挙げた衛青が大将軍となった時に、彼の一族もそれぞれ侯に封ぜられた。発干侯に封ぜられたのは、衛青の息子の衛登である。<sup>(31)</sup>後漢時代には、当時幽州を拠点としていた公孫瓚が冀州の袁紹を牽制するために、発干に陶謙を配したという記述が『三国志』にある。<sup>(32)</sup>なおこの時高唐に劉備を配し、平原に単経という人物を配している。つまりこの一帯が、当時の公孫瓚と袁紹の交界地であったということになる。また後漢末期の建安一七年(二二二)に曹操は魏公となった際に魏郡の領域を拡張したが、その中に発干の記述が見られる。<sup>(33)</sup>

新修『莘県志』によれば、現在の河店郷馬橋村附近に位置する。<sup>(34)</sup>

#### 貝丘県

『水経注』河水注を見ると、<sup>(35)</sup>応邵が『左伝』を引き、齊侯が田獵を行った場所としている。<sup>(36)</sup>しかし杜預注や清代の高士奇『春秋地名考略』、楊伯峻『春秋左伝注』等を見ると、この「貝丘」は現在の臨清市のものではなく、博昌県の貝丘、すなわち『続漢書』郡国志に記される「貝中聚」であるという。<sup>(38)</sup>同じく田獵の地として記される「姑婁」は臨淄の北に位置する「薄姑」とされる。臨淄から二〇〇キロは離れている臨清市の貝丘は、同じ「田獵地」

として記すには不自然である。杜預注等に記される博昌県の貝丘と思われる。

また『史記』楚世家に「涇丘」という地名が莒・即墨・午道と並んで登場する。『史記集解』は徐広を引いて「在清河」としているが、『史記正義』は『括地志』を引いて臨淄の近く、前述した博昌県の「貝丘」としている。<sup>(39)</sup>なお『中国歴史地図集』第一冊で現在の臨清市（漢代清河郡）付近に「涇丘」を置いているのは、恐らくこの『史記』楚世家の徐広注に因ると思われる。

『漢書』地理志に清河郡の県として記される。<sup>(40)</sup>『統漢書』郡国志では清河国に属するとある。<sup>(41)</sup>『後漢書』党錮伝によれば、巴肅という人物が「貝丘長」に任じられている。<sup>(42)</sup>

『太平寰宇記』によれば、北魏の時代に県城を東北十里の場所に移したという。<sup>(43)</sup>『魏書』地形志を見ると、貝丘は「清河郡」「東清河郡」の二箇所に記されている。後者には「劉裕置、魏因之。」と注されていることから、この東清河郡は劉裕（南朝宋の創始者）の北伐によって建てられた郡と思われる。<sup>(45)</sup>民国『臨清県志』によれば、前漢貝丘故城は現在の臨清市大辛莊郷近古村に位置するという。<sup>(46)</sup>

### 聊城県

『左伝』によれば、斉の西端邑の事例として挙げられている。<sup>(47)</sup>『史記』燕召公世家によれば、燕昭王二八年（前二八四）に楽毅によって斉が占領された際には、この聊城と莒・即墨の三城を残してすべて燕に下った。<sup>(48)</sup>しかし田単は魯仲連の協力を得てこの聊城を落とし、最終的に斉の全土を回復した。

前漢に入り、高祖が建国の功臣肅正を開始すると、代の相国に封ぜられていた陳豨は反乱を起こして配下の将・張春に黄河を渡って聊城を攻めさせた（二（四）参照）。

新修『聊城市志』によれば、聊城の古城は「聊古廟」「王城」「巢陵城」「孝武渡西城」の四箇所があるという。

そのうち最も古い「聊古廟」は北魏以前の県城とされ、現在の聊城市区内の申李村に位置する<sup>(51)</sup>。『水経注』河水注に「漯水又北、逕聊城県故城西。」とあるのは、『水経注』の成立当時、すでに聊古廟から次の王城へと県城が移転していたためと思われる。

#### 甘陵(唐) 県

前漢期には唐県と称し、清河郡に属す<sup>(52)</sup>。『統漢書』郡国志によれば、後漢安帝の時に甘陵に改めたとある。しかし『後漢書』桓帝紀を見ると、建和二年(一四八)六月に「清河(国)を改めて甘陵(国)とする」とある<sup>(54)</sup>。甘陵とは安帝の父・清河孝王劉慶に追尊して陵を立てたものであり、清河孝王伝によれば追尊されたのは鄧太后が崩じた時<sup>(55)</sup>、和熹皇后紀によれば永寧二年(一一二)になる<sup>(56)</sup>。つまり清河孝王劉慶に追尊して陵を立てた時に陵邑として唐県の名を甘陵県に改め、その後、建和二年(一四八)に桓帝が甘陵国に国号を改めたと考えられる。『太平寰宇記』に「後漢安帝改名甘陵県。」とあるのは、桓帝が甘陵国に改めたことを誤認していると思われる<sup>(57)</sup>。

#### 文亭城

『嘉慶重修一統志』に「博平県の北」とあるが<sup>(58)</sup>、この他に該当する記述はなく、詳細は不明である。

#### 平晋城

『晋書』戴記・石勒上によれば石勒が「平晋王」に封ぜられている<sup>(59)</sup>。新修『在平県志』には、石勒が最初に挙兵したのが在平県だったとある<sup>(60)</sup>。『晋書』に石勒が奴隸となったのは在平県の師權という人物とあるので、ここから引いてきたか<sup>(62)</sup>。

『太平寰宇記』によれば、永嘉の乱の後に石趙が郡理を宋代の清平県にあたる平晋城に移したとある<sup>(63)</sup>。宋代の清平県は新修『高唐県志』によれば高唐県旧城鎮に当たる<sup>(64)</sup>。

## 靈 県

二(一)にてすでに触れたように、春秋時代には靈丘と呼ばれ、斉の西辺の邑であった。<sup>(66)</sup> 前後漢を通じて清河郡に属す。<sup>(66)</sup> 二(五)にて触れたように前漢期に決壊が発生して、鳴犢河という支流が発生した箇所でもある。<sup>(67)</sup>

新修『高唐県志』によれば、現在の高唐県南鎮村にある。<sup>(68)</sup>

## 郇 県

前後漢を通じて清河郡(後漢は清河国)に属す。<sup>(69)</sup> 前漢初期には呂它と欒布が郇侯に封ぜられている。<sup>(70)</sup> また武帝期の丞相・田蚡がこの郇県を食邑としていたという記述が『漢書』溝洫志に見られる。<sup>(71)</sup> 後漢期には、馬武が光武帝建武一三年(三七)に郇侯に封ぜられている。<sup>(72)</sup>

新修『平原県志』に、現在の腰站鎮王双堂村の北に位置するとある。<sup>(73)</sup>

## 平原 県

戦国期、趙恵文王の弟・公子勝が、戦国四君子の一人とされる「平原君」に封ぜられる。清乾隆『平原県志』によれば、これが平原の名が歴史に登場する最初とあるが、<sup>(74)</sup> 位置的には現在の平原県ではない。『史記正義』に「今貝州武城県也。」とあるように、<sup>(75)</sup> 実際に封ぜられたのは「東武城」である。現在の平原県の西隣に位置する武城県の付近かと思われる。

前漢黄河を考察する際に重要なのは、当時の黄河は平原県を南北に貫いていたという点である。<sup>(76)</sup> 『水経注』河水注によれば漢代平原県は前漢河道の東側に位置するとある。<sup>(77)</sup> 二(一)で触れたように、趙は黄河東岸を確保するために、前漢黄河の東に位置する高唐県を幾度か攻めている。ここで趙王の弟が封ぜられたのが、黄河の東側に位置することから斉の領域に当たる前漢平原県ではなく、黄河の西側に位置する東武城であるということは、すなわち

趙は黄河西岸を領していたことになる。

新修『平原県志』によれば、前漢平原故城は現在の王廟郷張官店東に位置するとある。<sup>(78)</sup>  
繹幕県

前後漢を通じて清河郡（後漢は清河国）に属す。<sup>(79)</sup> 新修『平原県志』によれば、県城遺跡は未発見だが、平原県王  
杲鋪郷内と推測されている。<sup>(80)</sup>

鬲県

『太平寰宇記』に引く『郡国県道記』によれば、夏王朝時代の鬲国であるという。<sup>(81)</sup> 『左伝』によれば、夏王朝が  
羿・寒浞によって一旦滅ぼされた際に、夏の大臣であった靡が鬲国（有鬲氏）の力を借りて夏の王族である少康を  
立て、夏王朝を復興させたとある。<sup>(82)</sup>

新修『商河県志』によれば、現在の商河県懷仁鎮と張坊郷の間に位置するとある。<sup>(83)</sup>

#### 四 リモートセンシングデータによる検討

本研究で使用するリモートセンシングデータは、対象となる地域の地形・地質的特性によって決定する。たとえ  
ば河南省濮陽市付近（前稿④）ではSRTM-DEM（以下、「DEM」と表記）を使用して作成した立体地形モデ  
ルからの河道判読が有効であった。一方、河北省館陶〜大名県（前稿②）においては顕著な高低差が存在せず、D  
EMでの河道特定ができなかった。<sup>(84)</sup> そのため現地調査で収集した沙地要素の地理情報を使ってランドサット5TM  
データに対してクラスタリング（最尤法）処理を施し、画像を判読することで黄河故河道由来と思われる帯状の沙

地帯を特定した。ここでは前者の濮陽市と同様に、DEMを利用して立体地形モデルを作成し、河道復元のポイントとなる「黄河由来微高地」の特定を試みることにした。

## (一) 黄河由来微高地

DEMを利用して立体地形モデルを作成したところ、平原県の周辺に南西―北東方向に走る微高地が認められた。地形モデル上では高さ方向を強調することで視認可能としたが、この微高地の周囲との高低差は1〜2m程度と、実際には現地に立っても気づかないほどの微細な差異でしかない。しかしこの微細な差異が今までの検討範囲でも鍵となってきた。

DEMにて判読した微高地は、現在の河北省館陶県からほぼ北東に向かって一直線に延びている。今までの復元作業では、河道はこの微高地の範囲内におおむね収まる形であったが、今回は少し状況が異なる。館陶県付近からほぼ北東に向かうのは、『水経注』の記述からも誤りではない。ただし、途中の經由地点が文献記述と若干異なる。

今回の検討範囲内で前漢期に決壊を起こした地点は、すでに二(五)で紹介した通りである。このうち、微高地の範囲から外れる地点が一箇所だけある。「靈県(靈丘)」である。たった一箇所だが、決壊が発生した地点であり、外れるには問題がある。

そこでデータを更に詳細に検討し、従来の考察対象としていた幅数キロ単位の台地状の微高地だけでなくもっと幅の狭い、幅数100m程度の堤防状の微高地をも拾い上げることとした。すると臨清県の北側付近から北へ向かう二本と、聊城から前漢靈県付近を通して平原へと向かう南東側の一本の、計三本が見て取れた(図6)。このう

たことは十分想定できる。地形的に見ても、夏津県の辺りは黄河由来微高地が狭く、東西両面が微妙に抉られているようにも見受けられる。また後漢期の河道（東漢河）は平原県へとかなり近づいていたという記述が『史記正義』に見られる。<sup>(86)</sup>

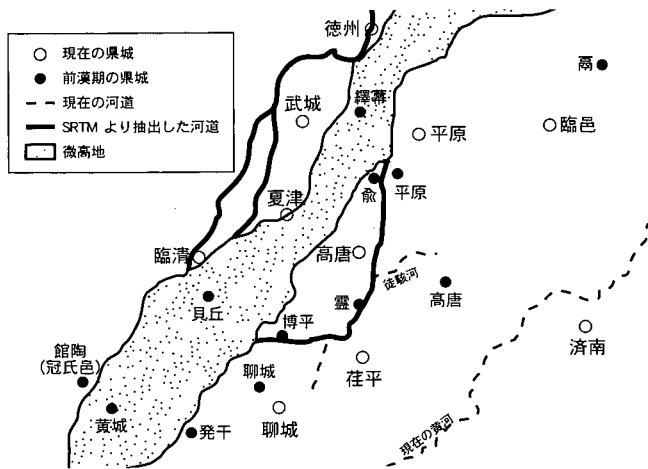


図6 SRTMからのリニアメント抽出

ち、『水経注』の記述と合致するのは最後のラインである。<sup>(85)</sup>

(二) 前漢河道の特性

過去にDEMを利用して特定した復元河道は、すべて微高地内に収まっていた。これは微高地が前漢期の黄河によって形成された自然堤防に由来する地形だったためである。しかし今回の対象地域における復元河道は今までとは違ってすべてが微高地内に収まっておらず、一部では微高地外に飛び出ている。これにはいくつかの要因が考えられる。

ひとつは、本来微高地であった場所が後年の黄河変動によって削り取られた可能性である。前漢河道が流れていた当時、そして河道が変更したあともしくはしばらくは黄河由来の微高地が残っていたのだが、以降に発生した河道変更や河川の決壊等によって痕跡が削り取られてしまったことが考えられる。特にこの地域では北宋期においてかなり黄河の流路が乱れたので、その時に削り取られる



もうひとつは、前漢河道自体が本流から外れていた可能性である。微高地の形状を見ると、前述したように館陶県からそのまま北東方向に延びている。河道としては極めて自然な形状である。対して、文献記述に基づいて復元した前漢河道を見ると、現在の夏津・高唐県付近を避けるような形状を為している。

『説史方輿紀要』川瀆異同二に、興味深い記述がある。<sup>(87)</sup>これによれば、前漢以前の黄河は魏郡から清河・信都を経由して勃海に入っており、平原郡または平原県は經由していない。つまり、DEMで判読した微高地を経由していたことになる。

逆に微高地の箇所が前漢黄河の本流であったと仮定して、文献記録を探してみた。すると前漢期にこの箇所を流れていた河道が見つかった。「屯氏河」という、「瓠子河決」の閉塞工事が完了した直後に館陶にて発生した決壊により派生した黄河の分流河道である。『漢書』溝洫志に「東北経魏郡・清河・信都・渤海、入海。」とあるように、微高地と合致している。<sup>(88)</sup>

上記記事の続きに興味深い記述が見つかった。「広深与大河等」、つまり屯氏河の河幅や深さが黄河本流と同等であったという記事である。現在の黄河下流、例えば山東省济南市付近では河幅は五〇〇m前後となる。<sup>(89)</sup>このような大規模な河道が短期間に形成されるとは考えがたく、むしろ黄河本流であった「故瀆」に流れ込んだことで、「広深与大河等」と称される規模の屯氏河になったと考えられる。

次に問題となるのが、①館陶↘聊城への東転河道の流れたライン②東転河道の発生した時期の2点である。まず、流れた箇所について考察を行う。

### (三) 館陶く聊城の東転河道

微高地から流出して靈県へと向かったラインはすでに考察済みだが、微高地内のラインが不明である。この箇所については立体地形モデル単体での詳細な考察は困難なので、視点を変えて文献資料、特に地方志の記述を利用する。この周辺に位置する冠県や臨清市、夏津県等の地方志、特に民国以前の県志を見ると、興味深い記述が見つかる。いずれも現在は河流や堤防が見当たらないはずの、冠県や聊城市・臨清県付近を東西に走る堤防に関する記事である。<sup>(90)</sup>

次に、台湾中央研究院所蔵の「一万分之一黄河下游地形図」を利用してみる。<sup>(91)</sup>この地図は民国期に作製された地図で、農業開発が行われる以前の状態を確認できる。つまり、現在には痕跡の残らない微細な地形が記されている可能性がある。すると、館陶県く堂邑県く博平県にかけて東西方向に走る「趙王河」という河川が地図上に確認できた。微高地から東へ流れて馬頰河へと合流する形状となっており、『漢書』や『水経注』、さらには前述した地方志の記述と一致する。

さらに現在または文献に残る地名から考察を進めてみる。中国には各地に「黒龍潭」と呼ばれる地形が散見される。「黒龍」は水底が暗く深い様を表し、滝壺や急流等で急激に掘り下げられた跡に水の溜まった状態の地形と思われる。通常は山岳地帯の水深が深い「淵」「沼」「湖」等に付けられるが、<sup>(94)</sup>平原地帯であるはずの黄河下流域にも「黒龍潭」と称される地名が散見される。

一方、地形学で「落堀（押堀）」と呼ばれる地形が存在する。これは河川の下流平原に見られる地形で、河道または旧河道の脇に形成されるお椀型の窪地を指す。河川決壊時に発生する局地的な急水勢によって掘り下げられ、形成されたものと考えられる。

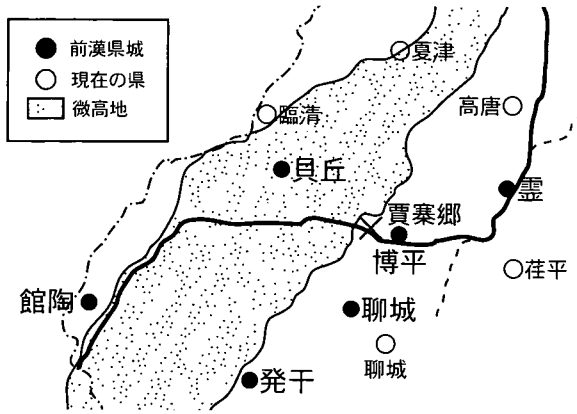


図7 東転河道

この地形的特徴を考慮すると、黄河下流域に点在する「黒龍潭」は黄河（またはその支流）によって形成された落堀地形である可能性が高い。黄河下流域では、黄河本流以外の箇所は小河川や人工的な渠道に限られ、落堀地形を形成する規模の水勢を得ることは難しい。そのため、これらの「黒龍潭」は過去のある時期における黄河、もしくは前漢武帝期に派生した屯氏河のような大規模分流での決壊によって形成されたと考えられる。

上記の条件に該当するのは河南省濮陽市新習郷と山東省茌平県賈寨郷である。前者は前漢武帝期に発生した「瓠子河決」の痕跡であることが判明している。<sup>96</sup>しかし、後者については『嘉慶重修一統志』『読史方輿紀要』などの地理書には記述が無く、状況が不明である。新修『茌平県志』を見ると、「決口扇形地」という地形が洪官屯・楊官屯・肖莊・菜屯・賈寨の五郷に渡って分布しているとある。<sup>96</sup>つまり賈寨郷を中心として東方向に決壊が起こったことが想定できる。

DEMを見ると、前漢黄河によって形成された微高地の東端に位置し、微細ではあるがお椀型の窪地を確認できた。また「一万分之一黄河下游地形図」から読み取った「趙王河」とも連なっている(図7)。

つまり、館陶から東へ転じた前漢初期の黄河が賈寨郷付近にて微高地から突出し、高唐方面へと流れ出して前漢後期の河道へ変更したと推測される。この微高地から突出して決壊した際に形成されたのが、現在の賈寨郷周辺の落堀地形である。決壊した黄河は東へ流れて徒駭

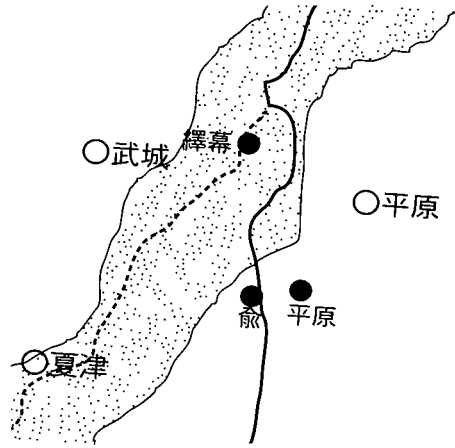


図8 微高地突入

河とぶつかる。ここで北へと進路を変えたのは、この徒駭河の河道を奪ったためである。

そのまま徒駭河の河道を流れて平原県付近を流れる箇所までは確認できたが、平原県以北の河道はどうなるか。微高地を超えて再び合流することは考え難いが、DEMには平原県付近から微高地へと突入した痕跡が確認できたため(図8)、再度合流したと判断した。<sup>(97)</sup>

この賈寨郷から高唐を経て平原県へと流れる黄河の痕跡、すなわちDEMから読み取った微高地の幅は、底部の最も広い箇所でも五〇〇m程度と、他の箇所と比べて非常に狭く低いものである。幅が狭いのは主に二つの理由が考えられる。一つは流れた期間が

短かったためと、もう一つは当時の黄河の流量が少なかったためである。

なお第一節にて提起した「直進を阻害する丘陵や高地等の地形的要因」と想定された「貝丘」は、DEMでは突出した丘陵等は確認できなかった。第三節にて検討したように戦国期ではなく前漢以降の設置であるため、むしろ黄河によって形成された微高地を「丘」と称したと思われる。また前述したように、実際には前一三二年前は黄河が直進していたため、阻害要因は存在しなかったと思われる。

(四) 東転河道の発生時期

次にこの東転河道が発生した時期について考察する。春秋末〜前漢期における黄河河道に関する記事を整理すると、以下のようになる。

- ① 黄河本流が禹河から変動し、濮陽から館陶・德州を経て渤海へと入る。(前六〇二年〜)
- ② 趙簡子・陽虎が濮陽付近にて渡河し、衛太子を戚城に入れる。(前四九三年)
- ③ 秦が項羽・劉邦に攻められた濮陽城防衛のために黄河から水を引いて濠を巡らす。(前一〇八年)
- ④ 東郡・酸棗にて決壊する。(前一六八年)
- ⑤ 頓丘の東南にて決壊し、河道が「徙」る。(前一三二年春)
- ⑥ 濮陽の西南・瓠子にて決壊が発生する。(前一三二年五月以降)
- ⑦ 館陶にて決壊し、屯氏河が派生する。(武帝末〜宣帝期)
- ⑧ 靈原鳴犢口にて決壊し、鳴犢河が派生する。(前三九年)
- ⑨ 魏郡にて決壊する。(後一二年)

胡渭『禹貢錐指』や譚其驥に代表される近年の説では、戦国〜前漢を通じて黄河の変動は発生していないとされていたが、微高地形成および屯氏河の状況を考慮すると、戦国末〜前漢初期頃に河道変動が発生していたと考えられる。他の決壊記事との関連を考慮すると、前漢期に黄河が移動したのは⑤前一三二年春の可能性がもっとも高い。決壊記事に「徙」とあることから、南宋の程大昌や清代の焦循はこの記事を以て黄河変動の証拠としている。<sup>(98)</sup>

この前一三二年春に黄河は館陶から東へと転じたが、この時期以降、前漢中後期は黄河の決壊が頻発した時期でもある。同年夏には瓠子河決が発生した。この決壊は二〇余年に渡って放置されたが、武帝自ら乗り出してようやく閉塞工事は完了する。しかしこの後館陶県付近にて決壊して、屯氏河が派生した。この屯氏河は七〇数年間の長

以上のように、山東省徳州市～平原県～聊城市に至る河道を特定した(図9)。微高地上の春秋～前漢初期の河道については、現在も臨清市～夏津県～徳州市に残存する帯状の沙地帯に基づいて特定した。

終わりに

ての微高地形成が十分に進行しなかったと考えられる。

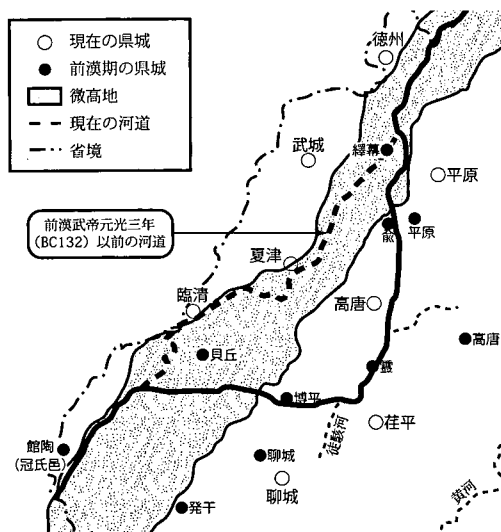


図9 復元河道図

きに渡って分流として維持され、黄河の安定化に貢献したとされる<sup>(9)</sup>。

またこの屯氏河が途絶したのと時期を同じくして、靈県付近にて鳴犢河が派生する。文献記事を考慮すると、鳴犢河は黄河からいったん分流した後、すぐに再び合流した。おそらく前述の賈寨郷で決壊した河道は微高地の東縁を流れ、「鳴犢河匯口」にて「前漢後期の黄河」に合流したのであろう<sup>(10)</sup>。

最終的に黄河が後漢河道に転じたのは王莽新・始建元三年(後一)である。この一四〇余年のうち、館陶～高唐の東転河道に黄河の全水勢が押し寄せたのは屯氏河が派生するまでのわずか数年間のみである。そのため、痕跡とし

今回の検討では、他地域では前漢河道由来としていた微高地が、従来説とは異なるラインを描いていた。ここから従来説には無かった前漢初期・武帝元光三年春の河道変更を導き出すことが出来た。この個所は現在では山東省夏津県や武城県などが設置されているが、『史記』や『戦国策』等を見ても該当する個所の記述が見当たらず、前漢以前における記述の空白地帯であった。文献から判読出来なかった事例を、リモートセンシングデータや現地調査・地図・地質等の情報を総合して読み取った。

また今回の河道復元によって、もう一つのこと が判明した。前漢期は二〇〇年間で一〇回の決壊が発生しているが、そのうち七回が今回の検討範囲である館陶・清河・平原に影響が及んでいる。特に屯氏河分流が発生した宣帝期以降では、鳴犢口決壊以外の五回で清河・平原が被害地域となっている。従来の説ではたとえば木村正雄は前漢王朝成立後一〇〇年以上を経過したことで黄河管理機構が疲弊し、機能が低下していたためとし、今村城太郎は「河身の老廃は覆うべくもなかった。」として河道の経年劣化に決壊頻発の要因を求めた。しかし今回の復元河道及び微高地を用いると別の側面が見えてくる。

館陶から聊城・霊県を経由して平原へと流下する河道は、前一三二三年春の小規模な河道変動によって成立した河道であった。そのため五〇〇年超をかけて形成された自然堤防を持つ箇所よりも河水量変化に対して脆弱であり、上中流域の気候変化やその他の箇所での決壊等の影響を受けやすい状態にあったと考えられる。

#### 【付記】

本研究の一部は日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「東アジア海文明の歴史と環境」(日本側拠点機関…学習院大学文学部、日本側コーディネーター…鶴間和幸、二〇〇五年九月～二〇一〇年三月)および日本科学協会・

笹川科学研究助成二〇〇八年度一般科学研究（人文・社会系）「リモートセンシングデータを利用した前漢期黄河河道の復元」の成果によるものである。

注

- (1) 水利電力部黄河水利委員会編『人民黄河』、北京、水利電力出版社、一九五九年
- (2) 黄河河道の復元に関する研究は、文献で確認できる最古の河道が『尚書』禹貢編に記されている関係から、儒教の經典である経書研究（『尚書』は五經の一つ）として古くから盛んに行われてきた。黄河河道の復元に関しては以下の文献を参照。
  - 胡渭『禹貢錐指』（胡渭著・鄒逸麟整理『禹貢錐指』、上海、上海古籍出版社、一九九六年）
  - 岑仲勉『黄河变迁史』、北京、人民出版社、一九五七年（後、岑仲勉著作集として二〇〇四年に中華書局より再版）
  - 張含英『歷代治河方略探討』、北京、水利出版社、一九八二年
  - 葉青超等『黄河下游河流地貌』、北京、科学出版社、一九九〇年
- (3) 鄒逸麟主編『黄淮海平原歴史地理』、合肥、安徽教育出版社、一九九三年  
《黄河水利史述要》編写組編『黄河水利史述要（修訂版）』、鄭州、黄河水利出版社、二〇〇三年  
譚其驤主編『中国歴史地図集』全八冊、北京、地図出版社、一九八二年  
楊守敬『水経注図』から譚其驤主編『中国歴史地図集』へと連なる系譜については吉開将人『中国歴史地図集』の論理—歴史地理と疆域観』（『史明』第三六号、二〇〇三年、三二—四八頁）を参照。
- (4) 藤田勝久『秦漢帝国の成立と秦・楚の社会』（愛媛大学法文学部論集）人文学科編一五、二〇〇三年、一—三六。後、藤田勝久『中国古代国家と郡県社会』、汲古書院、二〇〇五年に再録）では、出土資料である張家山漢簡「二年律令・秩律」を利用して、前漢初期（張家山漢簡は前漢呂后二年時点の法律条文が記される）の黄河下流域は東阿・在平・聊城までが泉置の北



東限であったとしている。聊城から渤海までの前漢黄河周辺には武帝期以降に中小侯国が多く設置されていることから、前漢初期には黄河周辺まで開発が届いていなかった可能性は考えられる。

(5) 発表済みの論文は以下の通り。

長谷川順二「前漢期黄河故河道の復元―衛星画像と文献資料の活用・濮陽を例に―」、『学習院史学』第四二号、二〇〇四年、一九七―二二一頁（前稿①）

長谷川順二「衛星画像を利用した黄河下流域古河道復元研究―大名・館陶を中心に―」、鶴間和幸編『黄河下流域の歴史と環境―東アジア海文明への道―』、東方書店、二〇〇七年、二七一―二八四頁（前稿②）

長谷川順二「前漢期黄河故河道復元―河南省武陟、新郷、衛輝、滑県―」、『中国水利史研究』第三五号、二〇〇七年、一一一―一七頁（前稿③）

長谷川順二「前漢期黄河故河道の復元―河南省滑県、濮陽市、南楽県―」（近待刊・前稿④）

(6) 鈕仲勛等編『歴史時期黄河下流河道変遷図』、北京測繪出版社、一九九四年

(7) 吳忱等「黄河下游河道變遷的古河道証拠及河道整治研究」、『歴史地理』第一七輯、二〇〇一年

(8) 「河水故瀆、東北逕斄干県故城西、又屈逕其北、王莽之所謂「戢楯」矣。漢武帝以大將軍衛青破右賢王功、封其子登為侯国。

大河故瀆、又東逕貝邱丘県故城南。応劭曰：「左氏伝」「齊襄公田于貝邱」是也。余按：京相璠、杜預並言在博昌、即司馬彪『郡国志』所謂貝中聚者也。応注于此、事近違矣。

大河故瀆、又東逕甘陵県故城南。『地理志』清河之厓也。王莽改曰「厓治」者也。漢安帝父孝德皇、以太子被廢為王、薨于此、乃葬其地。尊陵曰「甘陵」、県亦取名焉。桓帝建和二年、改清河国曰「甘陵」。是周之甘泉市地也。陵在瀆北、丘墳高巨、雖中経発壊、猶若層陵矣。世謂之「唐侯冢」、城曰「邑城」、皆非也。昔南陽文叔良以建安中為甘陵丞、夜宿水側、趙人蘭襄夢求改葬。叔良明循水求棺、果于水側得棺、半許落水。叔良顧親旧曰：若聞人伝此、吾必以為不然。遂為移殯、醢而去之。

大河故瀆、又東逕艾亭城南。又東逕平晋城南、今城中有浮園五層、上有金露盤、題云：趙建武八年、比釋道龍和上竺浮園澄樹德勸化、興立神廟。浮園以壞、露盤尚存、焯焯有光明。

大河故瀆、又東北逕靈県故城南、王莽之「播亭」也。河水于渠別出、為鳴犢河。

河水故瀆、又東逕郟県故城東。呂后四年、以父嬰功、封子佗為侯国。王莽更名之曰「善陸」。

大河故瀆、又東逕平原県故城西、而北絶屯氏三瀆。北逕繹幕県故城東北。西流逕平原高県故城西、『地

理志」曰「鬲津」也。王莽名之曰「河平亭」、故有窮后羿国也。応劭曰：鬲、偃姓、咎繇後。光武建武一三年、封建義將軍朱祐為侯国。」(『水経注』河水注五)

(9) 「東郡、秦置。莽曰治亭。属兗州。戸四〇万一千二百九十七、口百六五万九千二百八十八。泉二。濮陽、衛成公自楚丘徙此。故帝丘、顓頊虛。莽曰治亭。(畔) 觀、莽曰觀治。聊城。頓丘、莽曰頓丘。苑干、莽曰戢楢。范、莽曰建陸。在平、莽曰功崇。東武陽、禹治漯水、東北至千乘入海、過郡三、行千二〇里。莽曰武昌。博平、莽曰加睦。黎、莽曰黎治。清、莽曰清治。東阿、都尉治。離狐、莽曰瑞狐。臨邑、有〔涉〕廟。莽曰穀城亭。利苗、須昌、故須句国、大昊後、風姓。寿良、蚩尤祠在西北〔涉〕上。有胸城。樂昌。陽平。白馬。南燕、南燕国、媯姓、黄帝後。廩丘。」

「平原郡、高帝置。莽曰河平。属青州。戸一五万四千三百八十七、口六万四千五百四十三。泉一九。平原、有篤馬河、東北入海、五百六〇里。鬲、平当以為鬲津。莽曰河平亭。高唐、桑欽言漯水所出。重丘。平昌、侯国。羽、侯国。莽曰羽貞。般、莽曰分明。棗陵、都尉治。莽曰美陽。祝阿、莽曰安成。瑗、莽曰東順亭。阿陽。漯陰、莽曰翼成。枋、莽曰張郷。富平、侯国。莽曰棗安亭。安惠。合陽、侯国。莽曰宜郷。樓虚、侯国。龍領、侯国。莽曰清郷。安、侯国。」

「清河郡、高帝置。莽曰平河。属冀州。戸二〇万一

千七百七十四、口八万五千四百三十二。泉一四。清陽、王都。東武城。繹幕。靈、河水別出為鳴犢河、東北至蓼入屯氏河。莽曰播。厓、莽曰厓治。郟、莽曰善陸。貝丘、都尉治。信成、張甲河首受屯氏別河、東北至蓼入漳水。杼題。東陽、侯国。莽曰晉陵。信郷、侯国。縹。棗彊。復陽、莽曰棗歲。」

「勃海郡、高帝置。莽曰迎河。属幽州。戸二五万六千三百七十七、口九〇万五千一百一十九。泉二六。浮陽、莽曰浮城。陽信。東光、有胡蘇亭。阜城、莽曰吾城。千童。重合。南皮、莽曰迎河亭。定、侯国。章武、有塩官。莽曰桓章。中邑、莽曰檢陰。高成、都尉治。高樂、莽曰為郷。參戸、侯国。成平、虚池河、民曰徒駭河。莽曰沢亭。柳、侯国。臨樂、侯国。莽曰樂亭。東平舒。重平。安次。脩市、侯国。莽曰居寧。文安。景成、侯国。東州。建成。章郷、〔侯国〕。蒲領、侯国。」(『漢書』地理志)

(10) 齊靈公二八年(前五五四)に崔杼が莊公を立てた際の乱に乗じて、晋が齊を攻めて高唐に至ったという記述が『史記』齊太公世家に見える。またこのとき公子牙の傳であった夙沙衛が高唐に逃げて反乱したという記述が『左伝』にある。

「齊靈公二八年)八月、崔杼殺高厚。晋聞齊乱、伐齊、至高唐。」(『史記』齊太公世家)

「魯襄公一九年)夏五月壬辰晦、齊靈公卒。莊公即

位。執公子牙於句瀆之丘。以夙沙衛易己、衛奔高唐以叛。」〔左伝〕襄公一十九年伝

また、この六年後に齊莊公が崔杼のクーデターにより殺害された時また、晋が齊の高唐を攻めたという記述が『史記』に見える。

〔晋平公〕一〇年（前五四八）、齊崔杼弑其君莊公。晋因齊乱、伐敗齊於高唐去、報太行之役也。」〔史記〕晋世家)

さらに戦国時代に入り、韓魏趙の三国が齊の高唐を攻めたという記述が『史記』に見える。

〔趙肅侯〕六年（前三四四）、攻齊、拔高唐。」〔史記〕趙世家)

また『史記』田敬仲完世家には齊威王二四年（前三三三）に威王が梁（魏）恵王と会談を行った記事がある。その際に威王は四人の臣下を挙げ、彼らが国境を守り、国内の治安を維持していることこそが自国の宝であるとした。この時挙げられたうちの一人が田盼（盼子）であり、彼が齊の西端に位置する高唐を守ることで、西隣の趙国の民は河（黄河）で漁をしようとしないうという記述が見られる。

〔吾臣有盼子者、使守高唐、則趙人不敢東漁於河。〕〔史記〕田敬仲完世家)

(11) 『史記』に登場する「靈丘」は以下のように、『史記素隠』や『史記正義』などによってすべて「蔚州」の

靈丘であるという注釈が付されている。この「蔚州」靈丘は現在の山西省に当たり、当時は燕国の領域内に位置する。しかし以下の記述はすべて齊と戦国諸国、特に韓・魏・趙つまり三晋との戦争に関する記事である。これらの記事に登場する靈丘が現在の山西省に位置し、なおかつ各国の領域であると考えるには無理がある。李曉傑「戦国時期齊国疆域変遷考述」〔史林〕二〇〇八年四期）のように、むしろ齊の西辺に位置する「靈泉」が、この靈丘に当たると考えられる。

〔趙敬侯〕二年（前三八五）、敗齊于靈邱。集解、地理志云代郡有靈丘泉。」

〔趙恵文王〕一四年（前二八五）、相国彘毅將趙・秦・韓・魏・燕攻齊、取靈丘。正義、靈丘、蔚州泉也。」〔史記〕趙世家)

〔魏武侯九年・前三八七〕使呉起伐齊、至靈丘。正義、靈丘、蔚州泉也。時屬齊、故三晋伐之也。」〔史記〕魏世家)

〔韓文侯〕九年（前三七八）、伐齊、至靈丘。正義、靈丘、蔚州泉也。此時屬燕。」〔史記〕韓世家)

〔齊威王元年（前三五〇）、三晋因齊喪來伐我靈丘。正義、靈丘、河東蔚州泉。案：靈丘此時屬齊、三晋因喪伐之。韓・魏・趙世家云「伐齊至靈丘」、皆言蔚州。〕〔史記〕田敬仲完世家)

(12) 趙の独立及び華北平原への進出については陳昌遠

「趙國的疆域与地理特征」(『河北学刊』一九八九年五期)を参照。

(13) 詳細は前稿④参照。

(14) 「哀公一〇年」夏、趙鞅帥師伐齊、大夫請卜之。趙孟曰：「吾卜於此起兵、事不再令、卜不襲吉。行也！」於是乎取犂及轅、毀高唐之郭、侵及賴而還。」(『左伝』哀公一〇年伝)

(15) 平邑は濮陽の北、黄河の東岸に位置し、趙献侯一三年(前四一一)に趙が城を築いて以来、齊・魏・趙の争奪地となっていた。詳細は前稿④参照。

〔献侯〕一三年、城平邑。」

〔惠文王〕二八年、藺相如伐齊、至平邑。」

〔悼襄王元年、大備魏。欲通平邑、中牟之道、不成。〕

〔史記〕趙世家)

(16) 「燕封宋人荣盆為高陽君、使将而攻趙。趙王因割濟東三城(令)盧、高唐、平原陵地城邑市五七、命以与齊、而以求安平君而将之。」(『戰国策』趙策四)

(17) 文信侯呂不韋が秦を出国したのは、繆文遠『戰国策新校注』(成都、巴蜀書社、一九八七年)によれば秦王政一〇年(前二三七)に相国を免ぜられた時とある。

〔文信侯出走、与司空馬之趙。趙以為守相。〕(『戰国策』秦策五)

(18) 繆文遠『戰国策考辨』(北京、中華書局、一九八四年)は林春溥『戰国紀年』・黄式三『周季編略』・于鬯

『戰国策年表』等を引き、司空馬が平原津を通過して趙を去った年を秦始皇帝一八年(前二二九)としている。この年、趙は秦の謀略にかかって李牧(武安君)を誅殺し、翌年秦によって滅ぼされる。

〔司空馬去趙、渡平原。平原津令郭遺勞而問「秦兵下趙、上客從趙来、趙事何如。」司空馬言「其為趙王計而弗用、趙必亡。」平原令曰「以上客料之、趙何時亡。」司空馬曰「趙將武安君、期年而亡、若殺武安君、不過半年。趙王之臣有韓倉者、以曲合於趙王、其交甚親、其為人疾賢妬功臣。今国危亡、王必用其言、武安君必死。」(『戰国策』秦策五)

(19) 「平原令見諸公、必為言之曰「嗟嗟乎、司空馬。」

〔戰国策』秦策五)

(20) 「自琅邪北至萊成山、弗見。至之罘、見巨魚、射殺一魚。遂並海西。至平原津而病。始皇惡言死、群臣莫敢言死事。上病益甚、乃為璽書賜公子扶蘇曰：「与喪会咸陽而葬。」書已封、在中車府令趙高行符璽事所、未授使者。七月丙寅、始皇崩於沙丘平台。」(『史記』秦始皇本紀)

(21) 平原県には「千年古槐」と呼ばれる古木がある。平原県情網HPによれば、始皇帝が立ち寄った際にこの槐の木に馬の繩をかけて留まったという。二〇〇八年の現地調査の際に訪れた。

「虯龍槐」位於平原県腰站鎮原駅、官道大街南端、

現一〇五国道西側、腰站村十字街中心。当地百姓对此槐俗称为“千層槐”、“鉄裹槐”、说是因为歷代官宦在樹幹上貼告示、一層加一層、暴一層又貼一層的緣故。

這株古槐、年代久遠。当地民間傳說是：秦始皇為了尋求長生不老的仙丹靈藥、東臨泰山的時候（西元前一〇〇年）回駕不遠、病逝于平原津（挾平原旧志記載、平原津在城南四〇里、現已湮沒）、曾在這株大槐樹底下停屍、至今不招蚊蠅（挾史考、秦始皇突發病于平原津渡口、死于回長安的路上沙丘一現為河北省広宗県。病重的秦始皇路經腰站鎮、在此樹下歇駕較為可信）。

這株古槐、至今仍然生長葳然、枝繁葉茂、樹冠覆蓋直徑一〇・八米。尤為奇特的是在繁枝複映下、向西偏南的一枝古幹、有主幹橫出、長得“拱腰蒼勁、巨爪雄伸、形態逼真、莽弱虯龍”；“龍鱗龍爪、龍頭龍眼、龍須龍牙、歷歷傳神”、無怪乎有人說：“這可能是秦始皇死後回長安的意象在樹上長出來了。”此槐景觀、至今尤存、二〇世紀九〇年代初、選入“中華古槐”一書。〔平原県情網HP〕名勝古跡：<http://sd.infobase.gov.cn/sdgd/sde/ce5/msgj/5.htm> 1011年九月三日）

万衆、歳余乃下趙五十余城、為將數歳、反不如一醫儒之功乎。」於是信然之、從其計、遂渡河。齊已聽酈生、即留縱酒、罷備漢守禦。信因襲齊歷下軍、遂至臨菑。」〔史記〕淮陰侯列伝）

(23) 「西漢時建村。大将韓信夜渡平原津、在此扎營、奔襲齊之歷下軍、勝之。此村取名韓信營、簡稱韓營。現分東・西韓宮兩村。」（新修「平原県志」）

(24) 「高祖一〇年）八月、趙相国陳豨反代地。」〔史記〕高祖本紀）

(25) 「一二年、高祖在邯鄲誅豨等未畢、豨將侯敞將万余人游行、王黃軍曲逆、張春渡河擊聊城。漢使將軍郭蒙与齊將擊、大破之。」〔史記〕高祖本紀）

(26) 「元帝永光五年、河決清河靈鳴犢口、而屯氏河絶。師古曰、清河之靈泉鳴犢河口也。」〔漢書〕溝洫志）

(27) 「後二歳、河復決平原、流入濟南・千乘、所壊敗者半建始時、復遣王延世治之。」〔漢書〕溝洫志）

(28) 「河隄使者王延世使塞、以竹落長四丈、大九圍、盛以小石、兩船夾載而下之。三六日、河隄成。上曰：「東郡河決、流漂二州、校尉延世隄防三旬立塞。其以五年為河平元年。」〔漢書〕溝洫志）

(29) 「瓠子河決」について、詳しくは前稿④を参照。

(30) 「孝武元光中、河決於瓠子、東南注鉅野、通於淮・泗。上使汲黯・鄭當時與人徒塞之、輒復壊。是時武安侯田蚡為丞相、其奉邑食餼。酈居河北、河決而南則酈

無水災、邑收入多。」〔漢書〕溝洫志〕

(31) 「至塞、天子使者持大將軍印、即軍中拜青為大將軍、諸將皆以兵屬、立号而歸。上曰「大將軍青躬率戎士、師大捷、獲匈奴王十有余人、益封青八千七百戶。」而封青子伉為宜春侯、子不疑為陰安侯、子登為登干侯。」〔漢書〕衛青霍去病伝〕

(32) 「瓊使劉備屯高唐、单純屯平原、陶謙屯兗干、以通紹。太祖与紹会擊、皆破之。」〔三國志〕魏書・武帝紀〕

(33) 「一十七年春正月、公還鄴。天子命公贊拜不名、入朝不趨、劍履上殿、如蕭何故事。馬超余衆梁興等屯藍田、使夏侯淵擊平之。割河内之蕩陰・朝歌・林慮、東郡之衛國・頓丘・東武陽・兗干、鉅鹿之廩陶・曲周・南和、広平之任城、趙之襄國・邯鄲・易陽以益魏郡。」〔三國志〕魏書・武帝紀〕

(34) 「西漢初建兗干県、新莽時改名戢楯、北齊并入清淵県。兗干県故城遺址在今河店鄉馬橋村附近〔史書称在堂邑西南四〇里。〕(新修「莘県志」)

(35) 前掲注(8) 参照。

(36) 「冬二月、齊侯游于姑焚、遂田于貝丘。杜注、楽安博昌県南有地、名貝丘。」〔左伝〕莊公八年伝〕

(37) 「貝丘 臣謹按、水経注、渾水逕博昌県故城西、西歴貝丘。京相璠曰、博昌県南近渾水、有地名貝丘。在齊郡西北四〇里、即齊襄公田処。楚語、沈諸梁曰、齊

騶馬濡以胡公入貝水、亦即此。史記、謂之沛丘。後漢志、博昌有貝中聚是也。今博興県南五里有貝中聚、再考漢有貝丘県屬清河郡。応劭曰、齊襄公田処置貝州、今為恩県地、屬東昌府。此説杜所不取、仮以為然、則遠在數百里外姑焚、不得為薄姑・葵丘、不得在臨淄。種種難合矣。酈道元斥此為誤是也。」〔春秋地名考略〕

(38) 「楽安国。九城、戸七万四千四百、口四二万四千七百五。臨濟、本狄、安帝更名。千乘、高苑。楽安。博昌、有薄姑城。有貝中聚。有時水。蓼城、侯国。利、故属齊。益、侯国、故属北海。寿光、故属北海。有灌亭。」〔統漢書〕郡国志〕

(39) 「朝射東宮、夕發浪丘、夜加即墨、顧據午道、則長城之東収而太山之北举矣。集解、徐広曰：「在清河。」正義、括地志云：「浪丘、丘名也。在青州臨淄県西北二五里也。」〔史記〕楚世家〕

『史記正義』によれば「長城之東」「太山之北」は戦国齐国を指し、「尽举収於楚」、つまり楚頃襄王に容易に征服できることを説いているという。「東莒」は山東半島東端、「即墨」は山東半島南部に位置する。「午道」は『史記』張儀列伝によれば「趙之東、齊之西」に位置するといふ。つまり齊の西端を指す。「浪丘」が徐広の言う「在清河」とすれば、午道と重複する。ここでは『史記正義』の引く「括地志」の臨淄付近、つまり『統漢書』郡国志の言う「貝中聚」を指すとい

う説が妥当と思われる。

(40) 前掲注(9) 参照。

(41) 「清河国。七城、戸二万三千九百六四、口七六万四百一八。甘陵、故唐、安帝更名。貝丘。東武城。鄆。靈、和帝永元九年復。繹幕。広川、故属信都、有棘津城。」〔統漢書〕郡国志)

(42) 「巴肅子恭祖、勃海高城人也。初察孝廉、歷慎令、貝丘長。注、高城、県、故城在今滄州塩山県南。慎県属汝南郡。貝丘県属清河郡。」〔後漢書〕党錮伝)

(43) 「貝丘、在今県東南十五里。有漢貝丘県故城存、城中有貝丘、高五丈、周迴五十步、兼有後漢貝丘長博陵劉伯言、北海苑孟興二碑並文磨滅。後魏初移県於故城東北一〇里。今県東又有貝丘城、即後魏所治。」〔太平寰宇記〕魏州)

(44) 「清河郡、漢高帝置。領県四、戸二万六千三三、口二万三千六百七〇。清河、二漢・晋属。前漢曰唐、後漢安帝改爲甘陵、晋改。有河城。貝丘、二漢・晋属。侯城、太和一三年置。有侯城。武城、二漢・晋曰東武城、属、後改。有武城。有閭閻。」〔魏書〕地形志・司州)

「東清河郡、劉裕置、魏因之。治盤陽城。領県七、戸六千八百一〇、口二万二千五百七四。清河。繹幕、有隴水。鄆、有淳于髡冢・金雀山。零。武城、有昌国城。貝丘、有萊蕪城。饒陽、旧属青州、太和一八年分

属。」〔魏書〕地形志・齊州)

(45) 劉裕は東晋末の人物で、後に東晋を滅ぼして南朝宋(劉宋)を建てた。『資治通鑑』によれば劉裕は当時東晋の將軍として東晋安帝義熙五年(四〇九)から北伐を開始し、当時山東半島に割拠していた鮮卑慕容部の「南燕」を滅ぼした。このとき東晋は山東半島全域を獲得し、黄河(後漢河道)東南岸一体を手中に収めた。しかし清河郡は当時の黄河北西側に位置し、劉裕の征服した領域からは外れている。『中国歴史地図集』第四冊・北朝魏「兗、青、齊、徐等州図」でも「東清河郡」は『魏書』地形志の記述に依っており、前漢・西晋期に盤(般)陽県が置かれた箇所(現在の山東省淄博市南側付近)に比定されている。南北朝期、特に南朝では五胡に征服された北方の地名を自分の勢力範囲(主に南方)に付ける「僑置」が実施されていた。胡阿祥「晋宋時期山東僑州郡県考述」〔中国歴史地理論叢〕一九八九年三期)によれば、この時の「東清河郡」も、実際の清河郡とは異なる地域に置かれた「僑置」と思われる。ただし前述の「貝丘聚(淄博市の北東)」とは位置が異なる。

(46) 「漢貝丘故城 在今城東南、近古村西。後漢時置、属清河国。」(民国『臨清県志』古蹟)

(47) 「民人苦病、夫婦皆詛祝、有益也。詛亦有損。聊・撰以東、姑・尤以西、其爲人也多矣。注、聊・撰、齊

西界也。平原聊城県東北有楨城。」(『左伝』昭公二〇年伝)

(48) 「二八年、燕国殷富、士卒楽軼輕戦、於是遂以棄穀為上將軍、与秦・楚・三晋合謀以伐斉。斉兵敗、湣王出亡於外。燕兵独追北、入至臨淄、尽取斉宝、燒其宮室宗廟。斉城之不下者、独唯聊・莒・即墨、其余皆属燕、六歳。」(『史記』燕召公世家)

なお、『戦国策』斉策・燕策には「聊」は無く、斉側に残ったのは莒・即墨の二城のみとある。最終的に聊城は燕將に落とされたので、その点を考慮したのか。「燕攻斉、取七十余城、唯莒・即墨不下。」(『戦国策』斉策六)

(49) 「燕將攻下聊城、聊城人或讒之燕、燕將懼誅、因保守聊城、不敢帰。斉田单攻聊城歳余、士卒多死而聊城不下。魯連乃為書、約之矢以射城中、遺燕將。」(『史記』魯仲連伝)

(50) 「聊古廟 最早的古聊城所在地、位于今城西北七・五公里、西新河西岸。春秋時代、齐国西境。戦国時、為斉、燕争戦之地、也是齐国筑城屯兵的軍事要地。」(新修『聊城市志』景城)

(51) 「聊古廟」は二〇〇八年の現地調査にて訪れた。現在の聊城市区の北西に位置する。

(52) 前掲注(9) 参照。

(53) 前掲注(41) 参照。

(54) 「(建和二年)六月、改清河為甘陵、立安平王得子経侯理為甘陵王。」(『後漢書』桓帝紀)

(55) 「太后崩。有司上言：「清河孝王至德淳懿、載育明聖、承天奉祚、為郊廟主。漢興、高皇帝尊父為太上皇、宣帝号父為皇考、序昭穆、置園邑。」(大)「大」宗之義、旧章不忘。宜上尊号曰孝德皇、皇妣左氏曰孝德后、孝德皇母宋貴人追諡曰敬隱后。」乃告祠高廟、使司徒持節与大鴻臚奉策書靈綬「之」清河、追上尊号；又遣中常侍奉太牢祠典、護礼儀侍中劉珍等及宗室列侯皆往会事。尊陵曰甘陵、廟曰昭廟、置令・丞、設兵車周衛、比章陵。」(『後漢書』清河孝王慶伝)

(56) 「永寧二年二月、寢病漸篤、乃乘輦於前殿、見侍中・尚書、因北至太子新所繕宮。還、大赦天下、賜諸園貴人・王・主・郡僚錢布各有差。詔曰：「朕以無德、託母天下、而薄祐不天、早離大變。延平之際、海内無主、元元扈運、危於累卵。勤勤苦心、不敢以万乘為楽、上欲不欺天愧先帝、下不違人負宿心、誠在濟度百姓、以安劉氏。自謂感徹天地、当蒙福祚、而喪禍内外、傷痛不絶。頃以廢病沈滯、久不得侍祠、自力上原陵、加歎逆唾血、遂至不解。存亡大分、無可奈何。公卿百官、其他尽忠恪、以輔朝廷。」三月崩。」(『後漢書』和熹鄧皇后紀)

(57) 「清河県、旧二郷、今四郷。本州之甘泉市地、秦為厓泉。漢為信成泉、属清河郡、後漢桓帝改為甘陵泉、



故城在今県西北。統漢書州郡志：省信成県、属清河郡。按郡国記云：「隋清陽城内有漢清河王慶陵、在今郡東南三〇里故厓城是也。」後漢安帝改名甘陵、仍為甘陵国都、後国除復為県。晋省、于厓城西南七里置清河県。魏又為清河県并清河郡于故厓城中。高齊天保七年又移清河県于故信成。隋開皇六年又移清河県于州郭、即今県是也。」

〔故厓城、在県東南三〇里。按地理志云：「属清河郡、王莽改為厓治。」漢安帝改為甘陵。其地先出甘草、土人号曰鶴城。〕〔太平寰宇記〕河北道七)

(58) 「艾亭城、在博平県北。『水経注』、大河故瀆東逕艾亭城南。」〔嘉慶重修一統志〕東昌府)

(59) 「元海署掾督為親漢王、莫突為都督部大、以勒為輔漢將軍・平晋王、以統之。」〔晋書〕戴記・石勒上)

(60) 「公元三〇五年(晋永興二年) 汲桑和石勒率在平牧民赴清河、郃県参加公師藩義軍。公元三〇七年(晋永嘉元年) 公師藩失敗後、汲桑・石勒返回在平舉行武装起義、攻打郡県、占領郃城、殺晋新蔡王司馬騰。」〔新修『在平県志』大事記)

(61) 「既而売与在平人師權為奴。」〔晋書〕戴記・石勒上)

(62) 『水経注』河水注(前掲注(8))では、「平晋城」の記述のすぐ後ろに続いて「浮(仏) 凶澄」に関する記述がある。彼は石勒の信頼を得、事毎に仏凶澄に諮っていたという。つまり『水経注』にある「浮凶五層」

は、石勒が彼のために作ったものであると考えられる。「勒益重之、事必諮而後行、号曰大和尚。」〔晋書〕仏凶澄伝)

(63) 「貝州(中略) 永嘉乱後、石趙移郡理平晋城、即今博州清平県也。」〔太平寰宇記〕河北道七)

(64) 「清平県城遺址 清平県城(現旧城鎮) 遺址、一〇六九、一九四〇年为清平県城、一九四〇年清平県城遷址康莊、此地名曰「旧城。」(新修『高唐県志』文物)

(65) 霊丘に関する記述は前掲注(11) 参照。

(66) 前掲注(9) および注(41) 参照。

(67) 『統漢書』郡国志に引く『地道記』に、霊県に鳴犢河があると記されている。

〔靈、和帝永元九年復。注、『地道記』曰、有鳴犢河。〕〔統漢書』郡国志)

(68) 「霊城遺址 即漢霊県城址、現南鎮村。位于県城東南一七・五公里処。」(新修『高唐県志』文物)

(69) 前掲注(9) および注(41) 参照。

(70) 「兪侯 呂它 四月丙申封。四年、坐呂氏誅。」〔漢書〕高惠高后文功臣侯表)

〔兪侯 欒布 六年四月丁卯封、六年薨。〕〔漢書〕景武昭宣元成功臣侯表)

(71) 前掲注(30) 参照。

(72) 「(建武) 一三年、增邑、更封郃侯。注、郃、県名、属平原郡、故城在今德州平原県西南。郃音兪。」〔後

漢書』馬武伝)

(73) 「位于腰站鎮王双堂村北、距今泉城二〇公里、建于西漢。北齊時因鄆泉并入平原而廢。本世紀六〇年代尚在殘垣數段、七〇年代、連同村前古冢、都因搞農田基本建設而夷平。」(新修『平原泉志』文化・体育)

(74) 「戰國時、為趙所併封公子勝為平原君、食邑於此。平原之名、初見。」(乾隆『平原泉志』沿革)

(75) 「平原君相趙惠文王及孝成王、三去相、三復位、封於東武城。集解、徐広曰：「属清河。」正義、今貝州武城泉也。」(『史記』平原君列伝)

(76) 『水経注』河水注五(前掲注(8)参照)には鄆泉から平原泉にかけて東方向に流れていたとしているが、それでは各泉との位置関係が一致しない。楊守敬『水経注図』や譚其驤主編『中国歴史地図集』のように、平原泉付近の前漢黄河は南北方向に流れていたと思われる。

(77) 前掲注(8)参照。

(78) 「位于今王廟郷張官店東、距泉城一五公里、西周初年已為齊国西境下邑、戰国中期成為齊国重要地名之一、秦至北齊為平原泉城、漢初至北魏或為平原郡或為平原国所在地。古城牆由黄粘土夯打而成、牆下陶、瓦殘片俯拾即是。民国二一年(一九三二年)張官店村民肖連慶、在古城南門里挖出石井一口。用形如車輛的青石砌成、水深而甜。建国后又在城区發現石鏃・鬲足和陶罐

等。至本世紀六〇年代、在尚存的殘垣附近仍有一些破陶、瓦碎片。」(新修『平原泉志』文化・体育)

(79) 前掲注(9)および注(41)参照。

(80) 『水経注』載：「大河経平原泉故城西、鄆泉城東、北経繹幕泉北、経高泉城、再経平原泉。」『山東統考』称：「繹幕泉故城位于今平原泉城西北二五里。」古城址応今王泉鋪郷境内、但遺址未見。『統修平原泉志』疑今平原泉城即古繹幕泉城、不過与『水経注』不合。」(新修『平原泉志』文化・体育)

(81) 「故高城『郡国泉道記』云、古鬲国、酈姓、咎陶之後。」(『太平寰宇記』河北道一三)

(82) 「昔有夏之方衰也、后羿自鉅遷于窮石、因夏民以代夏政。恃其射也、不脩民事、而淫于原獸、棄武羅・伯因・熊髡・虓圍、而用寒泥。寒泥、伯明氏之讒子弟也、伯明后寒棄之、夷羿收之、信而使之、以為己相。淫行媚于内、而施賂于外、愚弄其民、而虞羿于田。樹之詐惡、以取其国家、外内咸服。羿猶不悛、将掃自田、家衆殺而亨之、以食其子、其子不忍食諸、死于窮門。靡奔有鬲氏。泥因羿室、生澆及豷。恃其讒惡詐偽、而不德于民、使澆用師、滅斟灌及斟尋氏。処澆于過、処豷于戈。靡自有鬲氏、收二国之燼、以滅泥而立少康。少康滅澆于過、后杼滅豷于戈、有窮由是遂亡、失人故也。」(『左伝』襄公四年伝)

(83) 「古城遺址 位于商河泉城西北懷仁鎮与張坊郷の交

界処、西距懷仁鎮古城村一公里、東距張坊郷の大姜村一・五公里、距皇城一三公里。遺址面積較大、共占地九千平方米、城牆遺址歷歷可見、院落・大型建築似有其形。城中間略低、東面有古城牆、長百多米、高二・七米、最寬處一〇多米。西面有南北大道、相伝為跑馬道。南面有高二・七米的点将台、遺址周圍多次發現陶盆・石斧・石磨・瓷罐・鉄獅等文物、這曾挖出一堵完好的牆壁、埋于地下〇・五米處、牆壁用青磚白灰墾制。磚長〇・五米、寬〇・三米。『德平県志』曾載、此城為古禹城、漢置、宋熙寧三年廢。明『讀史方輿紀要』及清『嘉慶一統志』載、東周麥丘在商河県西北。一九八二年出版的『中国歴史地図集』、『麥丘』也在該遺址方位。可見東周・東漢至北宋此地均為城邑。」(『新修『商河県志』古迹』)

(84) 大名(館陶地域)において微高地が見出せなかつたのは、当地では北宋期に「北流」と称される黄河の分流が貫通していたためと思われる。

(85) ここで見出した前漢河道は、靈泉故城付近にてその一部が現在の徒駭河と重なっている。

(86) 「至平原津而病。正義、今德州平原県南六〇里有張公故城、城東有天津焉、後名張公渡、恐此平原郡古津也。漢書公孫弘平原侯、亦近此。蓋平原即此津、始皇渡此津而疾。」(『史記』秦始皇本紀)

(87) 「又東北逕德州西、又東北經景州及滄州之境入於海。

德州、漢平原郡界也。河之故道本在平原以北、漢以前大概從魏郡・清河・信都・勃海界入海、皆与平原接壤、不徑至平原也。」(『讀史方輿紀要』川濱異同二)

(88) 「自塞宣房後、河復北決於館陶、分為屯氏河、東北經魏郡・清河・信都・渤海入海、広深与大河等、故因其自然、不隄塞也。」(『漢書』溝洫志)

(89) ここで指す「河幅」は、あくまでその時点において河水の流れる幅を指す。氾濫原や自然堤防まで含めると、黄河下流域では一〇キロ超となる箇所も少なくない。

(90) 「古堤 一名金堤、一名太黄堤。自冠県鴨窩村、隨家堤口入境、歴丘県境、東北至臨清李家倉、逾会通河、而北至柴二莊、入夏津境。歴趙家溝、韓家、侯家、張任家等堤、繞夏津東南兩門、東北歴三家堤、唐家堤、至桑家店入恩県界。」(道光『冠県志』、中国方志叢書所収)

「由館陶北界、李官莊西、營子莊東、入県境。由興隆莊折而西、至石仏莊北、唐家庄南、又西北至販腫莊東、房村廠南、又東北逾河折、而東繞新旧城至威武門外、東北經十方院、郭堤之南、至管辛莊入清平県界。又東北、經松林入夏津県界。此廢河。」(『民国臨清県志』、中国地方志集成・山東府輯所収)

(91) 「一万分之一黄河下游地形図」については中村威也「中国大陸十万分之一地勢図の種類とその資料的特徴

について―河北省大名県における外邦図・民国図・ソ連図の比較を通して―(鶴間和幸編著『黄河下流域の歴史と環境―東アジア海文明への道―』、東方書店、二〇〇七年、二三七―二六九頁)を参照。

(92) 堂邑県および博平県は民国以前に存在した県。現在は再編されて聊城市の一部となった。

(93) 「趙王河」は、現在では聊城市南側に位置する陽穀県から聊城市へと流れ込む河道に与えられている名称であり、同地区には陽穀県方面からの趙王河も記載されている。「一万分之一黄河下游地形図」の作者が、何故明らかに別河川と見なせるこの河道に「趙王河」の名称を与えたのかは不明である。この趙王河は現行地図や現地調査の際にも確認できなかったため、ここ五〇年ほどの間に埋没したのか、または渠道として再利用されたのであろう。

(94) 「黒龍潭」という地名は雲南省麗江県や河北省密雲県、山西省陽城県などにあるが、これらはすべて山岳地帯から平野への開口地域に位置する。

(95) 「黒龍潭」を含む河南省濮陽市周辺の河道復元については前稿④を参照。

(96) 「決口扇形地」分布在洪官屯、楊官屯、肖莊、菜屯、賈寨五郷(鎮)、面積一五二・二九〇畝、占全県土地総面積の九・六%。地勢起伏不平、有局部積水和沙窪塩漬現象。海拔三三―三四米、潜水埋四―六米。(新修

『在平県志』自然環境)

(97) DEMにて合流の痕跡が見られたことから、高唐、平原、德州に至る河道は賈寨郷決壊以前から黄河の支流として存在していたもので、決壊した河水がその河道に流れ込んだ、いわゆる「奪流」が発生したと思われる。この河道の一部が現在の徒駭河である。なお「徒駭河」は『尚書』禹貢や『爾雅』积水に記される古代黄河の分流、いわゆる「九河」の一つとされる。『尚書』禹貢編によれば春秋以前の河道「禹河」は大伾山(現在の河南省滑県)を過ぎて北へと流れ、大陸沢(現在の河北省邢台市)を抜けて「九河」に「播」、つまり多くの河道に分流したとされる。

「東過洛汭、至于大伾。北過降水、至于大陸。又北播為九河、同為逆河、入于海。」(『尚書』禹貢)

「徒駭、太史、馬頰、覆鬴、胡蘇、簡、絜、鉤盤、鬲津、九河。」(『爾雅』积水第二)

(98) 南宋・程大昌『禹貢山川地理図』では黄河の第一回改道を戦国周定王五年(前六〇二)、第二回改道をこの前漢武帝元光三年(前一三三)とし、王莽新始建国三年(後一一)の改道を含まない。焦循『禹貢鄭注釈』では周定王五年をカウントせず、古代の禹河河道が前漢武帝元光三年まで継続したとしている。

(99) 成帝期の清河都尉・馮遂の言による。

「成帝初、清河都尉馮遂奏言：『郡承河下流、與兗州東

郡分水為界、城郭所居尤卑下、土壤輕脆易傷。頃所以  
闢無大害者、以屯氏河通、兩川分流也。今屯氏河塞、  
靈鳴犢口又益不利、獨一川兼受數河之任、雖高增堤防、  
終不能泄。如有霖雨、旬日不霽、必盈溢。」〔漢書〕  
溝洫志)

(100) 『水經注』河水注に「逕鄆縣故城北、東北合大河故  
瀆、謂之鳴犢口。」とある。

(101) 發生地点だけでなく流出・被害地域を含む。一〇回  
の黄河決壊記事については佐藤武敏「王景の治水につ  
いて」〔中国水利史の研究〕、国書刊行会、一九八一  
年、三七五―三九八頁)を参照。

(102) 木村正雄「支那倉庫制發達の基礎条件―漢代に於け  
る『水』の建設と破壊」、『史潮』一〇―三、一九四一  
年、二七二―三二八頁。

(103) 今村城太郎「漢書溝洫志私考―古代中国の黄河対策  
とその周辺―」、『日本大学人文科学研究所紀要』九、  
一九六六年、一―二八頁。

#### 参考文献

本稿では現地の地方志、特に一九八〇年代以降に新たに編  
纂された「新修地方志」を多く利用した(本文中では  
「新修〇〇県志」等と表記)。以下に書誌情報を列挙す  
る。

山東省平原県志編纂委員会編『平原県志』、齊魯書社、

一九九三年

山東省莘県地方史志編纂委員会編『莘県志』、齊魯書社、

一九九七年

山東省茌平県地方史志編纂委員会編『茌平県志』、齊魯書  
社、一九九七年

山東高唐県史志編纂委員会編『高唐県志』、齊魯書社、一

九九三年

聊城市地方志編纂委員会編『聊城市志』、齊魯書社、一九

九九年

商河県志編纂委員会編『商河県志』、濟南出版社、一九九  
四年

# 前汉时期黄河故河道复原研究——山东省聊城市～平原县～德州市——

HASEGAWA Junji

Key words: Yellow-River, Xi-Han Dynasty, Ancient Riverway, Remote Sensing, Bursting

黄河, 前汉(王朝), 故河道, リモートセンシング, 决壊

西汉时期黄河下游频繁决口, 特别是现在山东省西部聊城市至德州市一带曾发生过多决口。此前的研究多将决口频繁归因于黄土高原的环境变化或是西汉黄河的河道崩坏等, 许多研究者提出了各种原因假设。SRTM-DEM 是一种遥感数据, 能提供研究区域微地貌的详细资料。本研究将在前人习用的文献资料和地质资料基础上, 进一步利用 SRTM-DEM 数据探索古黄河河床遗迹和复原决口的详细状况, 据以复原西汉时期黄河古河道的具体情况。